





小さな貝の破片を調べる

ピンセットで並べているのは、ムラサキイノコ (*Septifer virgatus*) という沿岸の岩場に密集して付着する貝類です。カラスガイやマルコとも呼ばれます。

宮城県気仙沼市にある台の下貝塚(縄文時代)の発掘調査では、土壌を1mmの目のフルイにかけてところ、非常に小さなムラサキイノコの幼貝の破片がたくさんみつかりました。これにより、縄文時代の人々が、岩に張り付いた大きな貝を素手で採っていただけでなく、ヘラなどを使って密集した貝をブロックごと剥ぎ取ったと考えられます。

このように、小さな破片まで丁寧に分析することによって、「何を食べていたのか」だけでなく、「どのように採集したのか」も検討できるのです。

環境考古学研究室では、東日本大震災の復旧・復興事業にともなう発掘調査への支援を継続的におこなっています。最終的には、岩手県や宮城県の7遺跡から出土した約15万点の出土資料を分析・報告する予定です。また、飛鳥資料館の春期特別展「骨ものがたり - 環境考古学研究室のお仕事」では、こうした復興支援を含めて、環境考古学研究室の仕事を紹介します。ぜひご来館ください。

(埋蔵文化財センター 山崎 健/飛鳥資料館 小沼 美結)